

December 28, 2025

忍耐の神

ペテロ第二 3:8-9

3:8 しかし、愛する人たち、あなたがたはこの一つのことを見落としてはいけません。主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。

3:9 主は、ある人たちが遅れていると思っっているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

きょうは、アドベント・キャンドルの真ん中にある「キリストのキャンドル」を灯し、「アドベント・キャンドル」を「クリスマス・キャンドル」に変えました。「キリストのキャンドル」は、救い主イエス・キリストが私たちとともにいて、私たちを照らし続けておられることを示します。

今年の「年間聖句」も、神が私たちとともにおられることを教えるものでした。キリストのキャンドルを見つめながら、一緒に唱えましょう。「わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたが行くところどこでも、あなたの神、主があなたとともにいるのだから。」（ヨシュア 1:9）神は私たちに「強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない」と言われましたが、私たちは、「ともにいる」と言われた神を忘れ、自分にはできないといってあきらめたり、困難に立ち向かう勇気がなくて、ただ心配したり、恐れたりするだけで、問題から逃げ、退くようなことがあったかもしれません。けれども、そんなときも、神は、「あなたが行くところど

こでも、あなたの神、主があなたとともにいる」との言葉のとおり、私たちとともにいて、私たちの行く先々に道を開いてくださいました。一年を振り返るとき、神がどんなに私たちに忍耐し、寛大に取り扱ってくださったかをしみじみと思いません。聖書が教えるように、神は、じつに、「忍耐の神」です。

一、神の忍耐

神が「忍耐の神」であることが一番よく表れているのは、神の、ご自分の民に対する取り扱いでしょう。

神はイスラエルの人々に、「わたしはあなたがたを取ってわたしの民とし、わたしはあなたがたの神となる」（出エジプト記 6:7）、「わたしはあなたがたの間を歩み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる」（レビ記 26:12）と言われ、イスラエルをエジプトから救い出して、ご自分の民としてくださいました。全世界の、いや全宇宙の主であるお方が、もとをだどれば、自分の土地さえ持たず、家畜を追って点々としていた遊牧の一家、また、エジプトで最も低い階級、奴隷であった者たちの神となってくださったのです。主なる神が「イスラエルの神」となり、イスラエルが「神の民」となる。これ以上に恵み深いこと、確かな保障、そして、特権はありません。

ところが、イスラエルは、全能の神の大きな奇跡を見ながら、約束の地に向かう間、「飲む水がない」、「食べ物がない」などと、何度も不平を口にし、ついには、エジプトの神々の一つであった「金の子牛」の像まで作って、それを礼拝するようなことさえしました。詩篇 78:40-41 に「幾たび彼らは 荒野で神に逆らい／荒れ地で神を悲しませたことか。彼らは繰り返

返し神を試み／イスラエルの聖なる方の心を痛めた」とあるとおりです。

けれども、神は、イスラエルに忍耐の限りを尽くされました。同じ詩篇にこう書かれています。「しかし 神はあわれみ深く／彼らの咎を赦して 滅ぼされなかった。／怒りを何度も抑えて／憤りのすべてをかき立てられることはなかった。神は心に留めておられた。／彼らが肉にすぎないことを。／吹けば戻らない風であることを。」（詩篇 78:38-39）

私たちのうち、誰か、この神の「忍耐」や「あわれみ」のいない者があるでしょうか。私たちの誰も、正しい神の前に罪ある者、聖なる神の前に汚れた者、神の怒りに触れて滅びて当然の者でした。聖書に「私たちもみな、不従順の子らの中にあって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした」（エペソ 2:3）とある通りです。しかし、神は、そんな私たちをあわれんでくださいました。聖書は続いてこう言っています。「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。」（4-5節）

この聖書、「エペソ人への手紙」を書いたのは、使徒パウロですが、彼がそのように書いたのは、信仰の論理によってだけではなく、自分自身の体験からでもありました。パウロは、ユダヤの血筋を保ち、律法の伝承を守る「生粋のユダヤ人」としての誇りの中に生きていました（ピリピ 3:4-6）。イエスが十字架にかかれ、よみがえられ、ペンテコステに教会が生まれ

たとき、パウロはエルサレムにいて、その一部始終を見聞きしていましたが、彼は、イエスの教えも、弟子たちの証しをも否定し、それらは律法を犯すものであると決めつけました。そして、キリストを信じる者たちを捕まえては牢獄に入れていました。ところが、パウロは、イエスにお会いし、イエスがキリストであり、律法が指し示していたのがこのお方であることを知りました。キリストへの信仰を持ったとき、彼は、迫害者であった自分に忍耐し続けてくださった神のあわれみを身をもって知ったのです。パウロはこう言っています。「私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに満ちあふれました。『キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた』ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。」（テモテ第一 1:13-16）パウロは、自分が救われたのは、キリストに敵対し、キリストを信じる者を迫害してきた自分を、神が忍耐してくださったからだと言っています。自分のような罪人でさえ救われたのなら、どんな人も救われるはずだと信じて、イエス・キリストを宣べ伝えたのです。

二、キリストの忍耐

この神の忍耐は、イエス・キリストのうちに形をとって現れてています。聖書に「主があなたがたの心を導いて、神の愛と

キリストの忍耐に向けさせていただきますように」（テサロニケ第二 3:5）とありますが、この「キリストの忍耐」とは、私たちの救いのために、十字架の苦しみを耐え忍ばれたことを指しています。イエスが十字架の苦しみをどのように耐え忍ばれたかは、ペテロ第一 2:22-23 にこう書かれています。「キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。」

イエスがゲツセマネの園で捕まえられ、祭司長たちから死刑の判決を受け、十字架につけられるようになったのは、イエスにそれをはねのける力がなかったからではありません。イエスは、御使いに命じて自分を捕まえにきた者たちを蹴散らすこともできました。しかし、父なる神のみこころに従い、イエスは自ら彼らの縄にしばられ、続いてローマ兵の鞭を受け、十字架に釘付けにされたのです。十字架にかかられたイエスに、「キリスト、イスラエルの王に、今、十字架から降りてもらおう。それを見たら信じよう」（マルコ 15:32）とあざけた人がいました。イエスには十字架から降りる力がありませんでした。しかし、そうしたら、私たちのための救いがなくなってしまう。イエスは、そのようにあざける人の救いのためにも、十字架に留まり続けたのです。イエスを十字架にとどめたのは、人々の憎しみやローマの権力というよりは、イエスの私たちへの愛だったと言えるでしょう。イエスは私たちのために、罪の赦しを勝ち取るために、十字架に留まり続け、最後の最後まで、その苦しみを耐え忍ばれました。

神の忍耐は、十字架に形をとって表れています。よく、愛を表すのに、ハートの形が使われますが、神の愛の形はむしろ、

十字架の形をしていると言ってよいでしょう。十字架に現された、キリストの忍耐、神の忍耐を覚えたいと思います。

三、再臨と忍耐

イエスは十字架から三日目に復活され、それから四十日して天に帰られました。イエスは弟子たちの見ているところで、雲に包まれ、大空の中に吸い込まれるようにして姿を消しました。弟子たちが、その後も、空を見上げていると、御使いがこう言いました。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」（使徒 1:11）イエスがもう一度、世に来られるとの約束です。クリスマスには「しもべ」の姿で世においでになったイエスは、もう一度来られるとき、「再臨」のときには、「王の王、主の主」として栄光のうちにおいでになります。きょうのペテロの手紙の箇所は、その再臨についての教えです。

イエスは、再臨の前には、前兆があり、神の世界歴史に関するご計画が成就すると教えられました。そして何よりも、福音が全世界に宣べ伝えられてから、再臨があると言われました。マタイ 24:14 に、「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます」とある通りです。初代教会の時代には、ローマ帝国が「全世界」でしたから、福音がローマ帝国内に広がり、教会がローマ皇帝から迫害を受けるようになって、クリスチャンの多くは明日にでも再臨があるのではと期待するようになりました。しかし、再臨はありませんでした。それで、信仰者の中にも、「再臨など

ないのではないか」と疑う人々が現れました。それで、使徒ペテロは、この手紙を書いて、再臨について自分勝手な判断をくださず、それを忍耐深く待つようにと教えたのです。

再臨の日は、救われた者には大きな希望です。その時、救いが完成し、世界に正義が確立するからです。しかし、その日は、まだ救われていない人には、救いの機会を失う日でもあるのです。なぜなら、再臨は神の審判の日でもあって、イエスの救いなしには、誰もそれから逃れられないからです。

ある人が乱れた世の中を嘆き、「神が正義のお方だったら、どうして世の中の悪を許しておられるのだ。今すぐに、悪を滅ぼしてしまえばいいのに」と言いました。それを聞いたクリスチャンの友人がこう答えました。「君はほんとうにそう思うのかね。神が今すぐ悪を滅ぼされるとしたら、僕も君も、たちまち滅ぼされてしまうんだよ。なぜって、僕たちにもまだ悔い改めていない罪があるからさ。神は罪や悪を憎まれるが、罪人が悔い改め、悪人が立ち返るのを忍耐して待っておられる。審判の日は今すぐでないのは、そのためなんだ。」そう言われて、その人は、改めて聖書を読み直し、神の忍耐を見出し、クリスチャンになったとのことでした。

今日の箇所9節をもう一度読みましょう。「主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」この御言葉は、愛の神が、なによりも私たちの救いを願っておられる。忍耐の神は、私たちが悔い改めるのを待っておられる。そうしたことをはっきりと教えています。

一年をふりかえるとき、誰しも、神のみこころに適わないことが多かったのに、神が忍耐をもって導いてくださったことを思い返すことでしょうか。肉親を亡くしたり、健康を損ねたりなどの試練や痛みの中でも、「あなたの神、主があなたとともにいる」との言葉通り、主がともにいて守り、支えてくださったことを思いかえします。神の忍耐に支えられた一年を感謝し、新しい年の一日一日には、神の忍耐深い愛に答え、「キリストの忍耐」を与えられて歩みたいと思います。

(祈り)

忍耐と寛容の神さま、私たちはあなたの忍耐によって救われました。そして、これからも、あなたの豊かないつくしみと忍耐と寛容によって救われ続けることでしょうか。そのことを思って感謝します。多くの人々の救いを願って、私たちも忍耐をもって祈り、あなたの愛を証しすることができるよう助けてください。イエス・キリストのお名前です。